

裁文章をまねび似せて、此の史傳文は書きたるなり。されば表面を見れば、假作物語の様なれど、裏には世にありし事實を書きおらはされしものにて、漢文の歴史などには得もかゝぬ、公家の有様言語風俗、さらぬ隠るへ事のくま／＼迄、明らかにか知らるゝなり。此の類の書にては、榮花物語、今鏡など右の躰なり。大鏡に至りては、やゝ物語の躰を離れて、まづ天皇の御世系を掲げ、次に大臣の傳に及べり。水鏡も同じ躰なれど、大臣の傳なし。又今昔物語の如きは、一人の傳記、又は人の一生にありし、事件の顛末をかゝれたるなり。

(一) 榮花物語

この物語は、村上天皇の御時より、堀河天皇の御時迄、凡そ百四十餘年間の、上下の有様を、たいありのまゝに書き取りたるものにて、文章の上のみならず、歴史の一として見むにも、貴き書なり。榮花と名つけたるは、御堂關白道長公の榮花の様を、むねと書きたればなり。一名を世繼物語とも云ふ。作者は赤染衛門とも、源朝臣頼朝の孫と云ふも、確ならず、先輩の傳に請はれることと、源朝臣赤染衛門

門、其他諸才女たちの、日記家集などを取集めて、綴りなしと明らかにせらる。其の三十一段以下は、別人の補綴といへるも、さるものゝ如し。

長和三年の春の條

はかなく年もかへりて、長和三年に成りぬ。正月一日よりはじめ、新しくめぐらしき御有様なり。新玉の年立ちかへりぬれば、雲の上もはれ、しう見えて、そらをあふがれ、夜の程に立ちかはりたる春の霞も、紫にうすく濃くなびき、日の景色うら／＼かに光りさやけく見え、百千鳥も囀りまさり、よろづ皆こゝろあるさまに見え、枝になかりつる花も、いつしかと、ひもをとき、垣ねの草も青みわたり、あしたの原も、荻のやけ原かきばらひ、かすが野のとぶひの野も、萬代の春のはじめのわか菜をつみ、氷とく風もゆるく吹きて、枝をならさず、谷の鶯も行末はるかなる聲に聞

えて耳とまり、舟岡の子の日の松も、いつしかと君にひかれて、萬代を經んと思ひて、常磐かきはの緑の色ふかく見え、もたいのほとりの竹葉もすゑの世はるかに見え、階のもとのさうびも夏を待ち顔になどして、さまよめでたきに、朝拜より始めて、よるづにをかしきに、宮の御方の女房のなりども、常だにあるに、まいて物あざやかに薰り深きもことわりと見えたり。殿上にまんどりといひて、こぢなく酔ひのしりて、うたてく、らうがはしき事どもさしまじるべし。さるべき公の御政をもおぼしまぎれず、うへ三條帝中宮の御方に渡らせ給へり。えもいはずめでたき御直衣に、なべてならずかゝやくはかりなる、おほんごどもを重ねさせ給へり。御かたち有様をかしう、らうくしう耻かしけにおはします。宮の御まへは、萌黄の御几帳に、はたがくれておはします。紅梅の御

衣をぞ、やへにもすぎて、いくつともなく奉りたるうへに、浮き紋の色こまやかなるを奉りたるに、同じ色の御扇のかたそはのかたに、大きな山かきたるを、わざとならず、さしかくさせ給へる御有様、なべてならず、耻かしけにけだかうおはします。御さしのおさましう長く、所せけにおはします程、いかでかくと見奉らせ給ふ。織物に髪みだるといふ事は、髪のかるびれ少き時の事也けり。やがてうるはしくすかりて、ひまもなくめでたくおはします。上いづらは若宮皇子はどのたまはすれば、命婦のめのと抱き奉りて参る。御はかし、辨のめのもて参る。御さしをそがせ給へれば、おしかへし、今こそちごなりけれど、それにつけても、あな美しと見奉らせ給ひて、抱き取り奉らせ給ひて、もちひかゝみ見せ奉らせ給ふとて、聞きにくきまで祈り祝ひつゞけさせ給ふ事どもを、

御前に候ふ人々はえ念せず、おのづからうちさしめき、卯づゑ、ほがひなどいふ心ちこそすれとて、忍びやかに笑ふを、いかにくど仰せらるゝ程も、すゞろにめでたく覺えさせ給ふ。御めのとち、我れもくくと花を折りてつかうまつる程も、あらまほしけなり。宮と御物語せさせ給ひて、うち笑はせ給ふなども聞ゆ。若き人々おしこりたる御几帳のきはなど、繪にかまほし。大納言殿参らせ給へれば、志ほし御物語などありて、やがて御どもに仕うまつらせ給ひぬ。四宮師四の御ぐし長うて、御直衣すがた、女をつくり立てたらんやうに見えさせ給ふ。事どもやうくはてし、心のどかになりもていきて、うへより松に雪の氷りたるを、

春くれど、過ぎにしかたのこほりこそ、

まつに久しく、とゞこほりけれ。

とあれは宮の御かへし、

千代ふべき松のこほりは春くれど、

うちとけがたき物にぞありける。

つごもりに成りぬれば、つかさめしとて、嬉しきもさらぬもあり。かくて内わたりめでたくて、過ぎさせ給ふほどに、火出できてやけぬ。みかども宮も松本といふ所にわたらせ給ひぬ。いづれの御時もかよふことはあれど、心のどかにしもおほしめされぬに、かかる事をいとくちをしく覺さるべし。三日ありてやがて内裏作るべき事おぼしおきてさせ給ふ。其の折の修理のかみには、皇后宮の御せうとの通任のきみ、南殿作るべく仰せらる。木工頭にはこの宮の御めのとの男、中務、太輔ちかよりありし君を、この司めしになさせ給へりしかば、清涼殿をはそれつくること殿

をば、たゞ受領おのゝ皆つかうまつるべき宣旨下りて、宮の使部はら、國々にあかれぬ。此の四月みあれの日より、手斧始めて、來年の四月以前に作り出さゞらんをば、つかさをとり、國を召し返しなどせさせ給ふべき由の宣旨下りぬ。かくきびしく仰せられしかば、まづ近き國々南殿清涼殿などは、皆四月棟上、ゆんとす。おほやけ事はことなるものなりけり。と見あさみ思ふべし。

上東門院田植御覽の條

かくて賀茂の祭などもすぎて、五月になりぬ。大宮土御門殿におはしませは、^{道長}殿の御まへ、なほわさをして御覽せさせんと申しめして、この殿の御まやのまゝさのたね。殿の北わたりせが井のものとにぞうるける。此の頃植うべかりければ、みまやのつかさめして、この田植ゑん日は、れいの有様ながら、つくろひたる事なくて

ものをこがましうも、いかにもありのまゝにて、此の南の方の馬場の御門よりあゆみつゞかせて、らちのうちより通して北さまにわたすべし。丑寅の方のついひちをくづして、それより御覽じやるべきなり。東の對にてなん御覽すべきとおほせごとうけ給りて、いま二三日のほど、なにわさをと思ひてその日になりて、かのすみのついひちくづさせ給ひて、東の對に宮の御前を始め奉りて、殿の上わたらせ給ふ。さるべき人々女房達候ふかぎりは参る。さて御覽ずれば、若うきたなけなき女ども五六人ばかりに、もてろもといふ物いと白うきせて、白き笠どもきせて、齒黒めくろらかにつけて、べにあかう化粧せさせて、つゞけたてたり。田あるじと云ふ翁、いとあやしき衣きき、やれたる大傘さよせて、紐ときてあしだばきたり。あやしき様したる女に黒きかいねりきせて、

はふにと云ふもの、むらはけ化粧して、それも傘さゝせて、あしだ
はかせたり。又田樂といひて、あやしき様なるつゞみ腰にゆひつ
けて、笛吹き、佐々良といふ物つき、さまゝの舞して、あやしの男
ども歌うたひ、心ちよけにほこりて十人はかりあり。そが中に、こ
の田つゞみといふものは、例の鼓にも似ぬ音して、ごぼゝとぞ
ならしゆくめる。親しうものし給ふ殿はらは、東の簀子にて見給
ふ。若き君達四位五位などは、高欄におしかゝりて、見興じ給ふ。又
いと大きな桶折櫃どもに、これらがくひ物どもなるべし。もて
つゞきたり。さまゝよに珍しきものどもをのみ、もてつゞけた
れは、いみじうめづらしう御覽ず。さていきつとひて、今は植ゑの
の志るを御覽じやるもいとをかしうおぼしめさる。ありつる樂
の者ども、道の程つゝましけに思ひたりつる、かしてにては我

がまゝに、のゝまりあそびし、かなでたるさまどもぞ、いみじうを
かしく御覽せられける。折しもこそあれ。雨すこしうちふりて、た
での袂どもゝ志ほどけゝなり。いつのほどにか、聞き集りけん。世
人かずまらずなみたちて、見るかほどもさへぞ、をかしう御覽せ
られける。この田人どものうたふ歌をきこしめせば、

さみだれに、もすそぬらして植うる田を、
君がちとせのみまくさにせん。

又聞しめせば

植うるよりかずもまられず、大そらを、
くらにぞつまんみま草のいぬ。

どうたふ歌さへつくりいでたれば、みまやづかさの心はへを、殿
ほらいみじうけうせさせ給ふ。よみ人たれと知らず。ほとゝぎす

のなきわたるを女房

早苗植うる折にしもなくほととぎす

志でのたをさとうべもいひけり。

又たれにか。

ほととぎす雲なるねにきこゆれど

志ほりもあへずたごのたもとば

などぞいひける。ことばてよみまやのつかさ召して御まへにて
いみじうけうせさせ給ひて、ものかつけさせ給ひけり。かやうに
思しのことす事なく、御心をやらせ給ふ。興ある御ありさまどもな
り。

(二)大鏡

こは一名を世繼と稱して、藤原爲業の作なりと云ふ。當時世繼と云ひしは、た

此の大鏡のみならず、榮花物語もまか云ひたるは、系譜やうの書を皆世繼と稱
せればなり。事實は文徳天皇の嘉祥三年より、後一條天皇の萬壽三年に至る、一
百七十六年間の事跡を擧げ、帝王の本紀と大臣の傳とに分ち記したる如きは、
本邦に紀傳體の史の濫觴とも云ふべきなり。序文中、二翁一士を假説して、其の
語る所を聞きがきせし様に物したる、此の作者の創意なるが、水鏡今鏡の類も、
皆この趣にならひたり。水鏡は、大鏡に文徳天皇以前の事蹟を缺きたれば、之を
補はんの意にて、溯りて神武天皇より、仁明天皇に至る迄を、あらくと記せる
ものにて、二卷あり、撰者は、内府忠親公なりといふ。其の文はさしたる事もなけ
れば、省きて引かず。

時平公の傳中菅公左遷の條

左大臣時平のおとゞは、基經のおとゞの御太郎なり。御母四品人
康親王のむすめ、醍醐のみかどの御時、この左大臣の位にて、年い
とわかくておはしき。菅原のおとゞ、右大臣の位にておはします。

その折みかど御年いと若くおはします。左右の大臣に、世のまつりごと行ふべき宣旨くださしめ給ひしに、その折、左大臣御歳廿八九計、右大臣御歳五十七八にやおはしけん。どもに世のまつりごとをし給ひしあひだ、右大臣さえも世にすめられ、めでたくおはしまし、御心おきても、ごとの外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、さえも殊の外に、おとり給へるに、より、右大臣御おほえ殊の外におはしましたるに、左大臣やすからずおほしたる程に、さるべきにやおはしけん。右大臣の御ために、よからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰権帥になしたてまつりて、流され給ふ。此のおとゞの子ども、あまたおはせしに、女きんたちは、むこどりし、男君たちは、皆ほどくにつけて、位どもおはせしを、それも皆、かたぶに流され給ひて、かなしきに、幼なくおはしける男

君女君たち、またひなきておはしければ、ちひさきはあへなんと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、共にあて下り給ひしそがし。みがどの御おきて、きはめてあやにくにおはしませは、この御子どもを、同じ方にだに遣はさうりけり。かたぶにいと悲しく覺して、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かば、にほひおこせよ。梅の花、

あるじなしとて、春をわするな。

又亭子のみかどに、聞えさせ給ふ。

ながれゆく、我ればみくづとなりはてぬ、

君まがらみとなりてとゞめよ。

なき事により、かく罪せられ給ふを、かしこくおほしなけきて、やがて山崎にて、出家せしめ給ひてけり。其の程きはめて、かなしき

事多かり。日ごろへて、都遠くなるまゝに、あはれに心ほそくおぼされて、

君がすむ、やどのこずるをゆくくと、

かくるゝまでも、かへりみしかな。

又播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ所に、御やどりせしめ給ひて、むまやの長の、いみじう思へるけしきを、御らんどて、つくらしめ給へる詩、いとかなし。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋、

筑紫におはしましつきて、あはれに心ほそくおぼさるゝゆふべ、をち方に、所々煙りたつを御覽じて、

夕されば、野にも山にもたつけふり、

なけきよりこそ、もえまさりけり。

又雲のうきて、たゞよふを御覽じて、

山わかれ、とびゆく雲のかへりくる、

かけ見るときは、なほたのまれぬ。

さりとも、世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

うみならず、たゞよふ水のそこまでも、

きよきところば、月を照らさむ。

これいとかしこく、あそほしたりかし。けに月日こそ照し給はめとこ。そはあめれ。誠に、おどろくしきとはさる物にて、かくやうの歌や詩などをさへ、いとなだらかにゆゑくしう、いひつゞけたまふと、見きく人、めもあやにあさましく、あはれにもまもりゐたり。物のゆゑ知りたる人なども、むけに近く居寄りて、外めせず。見きくげしきどもを見て、いよくはへて、物をくり出すやうに、

いひつゞくるほどぞ、誠にけうなるや。志けきなみだをのこひつ
く、けうじるたり。筑紫におはします所の御門もかためておはし
ます。大貳の居どころは、はるかなれども、樓のうへの瓦などの心
にもあらず、御らんじやられけるに、又いとちかく、観音寺といふ
寺のわりければ、かねの聲をきこしめして、つくらせ給へる詩ぞ
かし。

都府樓纒看瓦色、 観音寺只聽鐘聲、

これは、文集の白居易の、遺愛寺鐘、欵枕聽香爐峯雪撥簾看、といふ
には、まさゞまにつくらしめ給へりところ、昔の博士どもは申し
つれ。又彼の筑紫にて、九月九日菊の花を御覽じけるついでに、
まだ、京におはしまし、時、九月のこよひ、内裏にて、菊の宴ありし
に、このおとゞ、作らしめ給へりける詩を、みかどかしこく感じた

まひて、御衣賜はりたまへりしを、筑紫にくだらしめ給へりけれ
は、御覽するに、いとゞ其の折おぼしめし出で、つくらせ給ひけ
る、

去年今夜侍清涼、 秋思詩篇獨斷腸、
恩賜御衣今在此、 捧持毎日拜餘香、

此の詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事ども、たゞちりち
りなるにもあらず。かのつくしにて、作りあつめさせ給へりける
を、かき集めさせ給ひて、後集となづけられたり。又折々の歌、かき
おかせ給へりけるを、かのづから、世にちりきこえしなり。よつぎ
が若う侍りし時、この事の、せめてあはれにかなしく侍りしかば、
大學の衆の、なまふがうには、いますがりしを、訪ひたづねかたら
ひとりて、さるべき、えぶくる、わりごやうのもの、調じて、うちぐし

てまかりつゝ習ひとりて侍りまかど、老いのけのはなはだしき
とは、皆こそ忘れ侍りにけれ。これは唯、すこぶるおぼえ侍るなり
といへば、きく人々、けにくいみじきすきものにも、物志給ひけ
るかな。今の人ば、さる心ありなんや。と感^あへり。また雨のふる
日、うちながめ給ひて、

あめのまた、かはける程のなけれはや。

きてしぬれぎぬ、ひるよしもなき、

やがてかじこにせうせ給へる、夜のうちに、北野にそこの松を
おほさしめ給ひて、渡りすみ給ふこそは、たゞ今の、北野宮と申
して、あら人神におはしますめれ。おほやけも、行幸せしめ給ひ、い
とかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしまし所は、安樂寺
といひて、おほやけより、別當所司などなさせ給ひて、いとやむこ

となし。内裏やけて、たびくつくらしめ給ひしも、圓融院の御時
の事なり。たくみども、うらいたどもき、いとうるはしくかなかき
て、まかり出でつゝ、又のあしたに、参りて見るに、きのふのうらい
たに、物のすゝけてみゆる所のありければ、はしにのぼりてみる
に、夜のうちに、虫のはめるなりけり。そのもじは、作るとも、又もや
けなん。菅原や、むねのいたまの、あらむかぎりば、^はどこそありけれ。
それも、この北野のあらはし給へるとこそは、申すめりしか。かく
てこのおとゞは、筑紫におはして、延喜三年みづのどの西、二月二
十五日に、うせ給ひしぞかし。御年五十九、さて後七年計りありて、
左大臣時平のおとゞ、延喜九年己巳四月四日、うせ給ふ。御歳卅九、
大臣の位にて、十一年ぞおはしける。本院の大臣と申す。

隆家卿刀夷賊を討ちばらふ條

帥殿の御一つ腹の十七にて、中納言になりなどして、世の中のさがなもののといはれ給ひし、殿隆家の御童名は阿古君ぞかし。三條院の大嘗會の御禊に、きらめかせ給へりしさまなどこそ、常よりもことなりしか。人の此のきは、さりともくづほれ給ひなれと思ひたりし所を、たがへむとおぼしよりしなれり。さやうなる所おはしまし、こそ。節會行幸には、かいねりがさねはたてまつらぬ事なるを、單衣青くて、つけさせたまへれば、もみちがさねにぞ見えける。表の御袴、龍膽の二重織物にて、いとめでたく、けうらにこそきらめかせ給へりしか。御目のそこなはれたまひしこそ、いといとあたらしかりしか。よろづにつくろはせ給ひしかども、やませ給はで、御まじらひたえ給へる頃、大貳の闕いできて、人々望みのよきりしに、唐人のつくろふがあなるに見せむとおぼして、試み

にならばやと申し給ひければ、三條院の御時にて又いとほしくもやおぼしめしけむ。二言となく成らせ給ひてしぞかし。その御北の方は、伊豫の守兼資のぬしの御むすめなり。そのはらの女君二所おはせし、一所は三條院の御子の式部卿の宮の北の方、今一所は傳殿の御子の小宰相のうへとぞきとゆめる。二所の御聲をとり奉り給ひて、いみじういたはり聞え給ふめり。政よくし給ふとて、筑紫の人さながらまたがひ申したりけり。例の大貳十年がほどにてのぼり給へりところ申し、か彼の國におはしまし、ほど刀伊國のもの、俄にこの國を撃ち取らむとや思ひけむ。越え來たりけるに、筑紫にはかねての用意もなく、大貳殿弓矢の本すゑをも知り給はねは、いかゞとおぼしけれど、やまと心かしこくおはする人にて、筑前、肥前、肥後、九國の人をおとさせ給ふをは

さるものにて、府の中に仕う奉る人をさへおしとりて、戦はしめ給ひければ、かやつが方の者ども、いと多く死にけるは、さはいへど家たかくおはします故に、いみじかりし事、平らけ給へりし殿ぞかし。おほやけ、大臣大納言にもなさせ給ひぬべかめりしかど、御交らひ絶えにたれば、唯にはおはするにこそあめれ。此の中にむねと射かへしたる者ども記して、公家に奏せられたりしかば、皆賞せさせ給ひにき。種材は壹岐守になされ、其の子は太宰監にこそはなさせ給へりしか。此の種材がぞうは、純友討ちたりし者の筋なり。此の純友は將門と同じ心にかたらひて、おそろしき事企てたるものなり。將門はみかどを討ち取り奉らんといいひ、純友は關白にならむと、同じく心をあはせて、この世界に我れと政をし、君となりてすぎむと云ふことを契り合せて、ひとりば東の國

にいくさをとるのへ一人は西國の海にいつくともなく、大筏を數えらず集めて、筏の上に土をふせて、うゑ木をおほし、四方山の田を作りすみつきて、大かたおぼろけのいくさにならざるべくもなくなりゆくを、かしくかまへて、討ちてたてまつりたるはいみじき事なり。そればけに人のかしとぎのみにはあらじ。王威のおはしまさむかぎりはいかでかざる事はあるべきとおぼえて、さて壹岐對馬の人を、いとおほく刀伊國に捕りもていきたりければ、新羅のみかどいくさをおこし給ひて、みなうちかへし給ひてけり。さて使をつけて、たしかに此の島に送りたまへりければ、彼の國の使には、大貳金三百兩とらせて、かへさせ給ひけり。

(三)今鏡

今鏡は、水鏡また大鏡などに對して、今代の事蹟をかきたるなれば、然名づく。又

の名を小鏡とも續世繼とも云ふ。此の書は榮花物語、大鏡の後を續きたるものにて、後一條天皇より高倉天皇の御代までを列記せり。かくて天皇の本紀をすへらぎの巻とし、道長公の子孫の傳を藤なみと云ひ、又次々を村上源氏と云ひ、皇子たちの巻など云へる。編成の跡は、大鏡に似たれども、巻の中を幾段にも分ちて、風雅なる題を命じたる、又文章の花やかなるなどは、凡べて榮花物語もしは世にある作り物語などにも倣ひけんとおぼし。

本書の作者は、古來知られざりしに、近き世に故人となりし、黒川春村翁は、中山内府忠親公ならむと云へり。若しさらば、水鏡の作者と云ふなり。内府は、京極太政大臣藤原師實公の曾孫にして、二條天皇の永曆の始め、藏入頭となり、六條、高倉、安徳の御代々々に歴任して、後鳥羽天皇の建久六年に薨せられしなりけり。

後朱雀天皇紀のうち初春

後朱雀院と申すは、さきの一條院の第三の皇子、御母上東門院先^{後一}帝と同じ御はらからにおはします。此の帝、寛弘六年戊酉と申じ

し年の霜月の廿五日に生れさせ給ひけり。七年正月十六日に、親王と聞えさせ給ふ。寛仁元年八月九日、東宮になしとせ給ふ。御年九と聞えさせ給ひき。長元九年四月十七日に、位につかせ給ふ。御年廿八、其の年御即位、大嘗會など過ぎて年をかばりぬれば、いつしか正月の七日、關白左のおとゞとて、宇治のおほきおとゞのおはします。女御奉らせ給ふ。帝の御兄におはしますし、式部卿の宮の御子の女君の、村上の中務の宮の御むすめの、御腹におはせしを、關白殿御子にし奉り給ひて、女御に奉り給へる也。一條院の皇后宮の、うみ奉り給へりし、一の御子におはします。春宮にも立ち給ふべかりしを、御うしろみおはします。二のみこにて先帝の御子にて此の帝ふたり、御堂のむまこ、關白の御おひにおはします。は、打ち續きつがせ給へる也。彼の一條院の皇后宮は、

御せうどの内のおとゞの筑紫におはしましし事どもに、おもほし歎かせ給ひて、御さまかへさせ給へりし後に、式部卿のみこを、うみ奉らせ給へる也。から國の、則天皇后の御らしかるさせ給ひて後に、王子うみ給ひけんやうにこそ覺え侍りしか。されど彼れは、さきの帝太宗の女御にて、後、帝隠れさせ給にければ、世を背きて、感業寺とかいふ寺に、住み給ひけるを、先の帝のみこ、位に即き給ひて、彼の寺におはして見給ひけるに、御心やより給ひけん。更に后に立て奉りけるを、是れは同じみよの、もとの后なるは、いたくかはり給はぬさまにて、なめなるさまにて侍りき。賢き御代の御事、申し侍るもかたじけなく、彼の皇后宮の女房、肥後守元輔と申すがむすめ、清少納言とて、ことに情ある人に侍りしかは、常にまかり通ひなどして、彼の宮の事も承りなれ侍りき。其の式部卿の

御子の、御女におはしませは、帝にはめひにあたらせ給へり。かくてやよひの朔日に、后にたよせ給ひぬ。御年廿二にぞおはしましし。もとの后聖は、皇后宮にならせ給ひき。其のもとの后は、帝東宮におはしましし時より、参り給へりき。三條院の姫宮におはします。それは御年廿五にならせ給へりき。陽明門院と申すは、此の御事なり。御ぐしのうつくしさを、故院え見まるらせぬ、くちをしとて、さくり申させ給ひけんも、思ひやられて、同じ后と申せどもやんことなくおはします。久しく内へ参らせ給はざりける比、内後朱雀より、

あやめ草、かけし袂のねをたえて、
さらばこひちに、まどふころかな。

と侍りけん。御返事は忘れにけり。東宮におはしましし時の、御息所なり。此の後に、御堂の六の君参り給ひて、内侍、督と聞え給ひし、

後冷泉院の今の春宮におはしまし、うみ置き奉りて、うせ給しかは、此の宮は、其の後参り給へるなり。故内侍督の御許に、霞の内におもふ心を、とよませ給ひたる、御歌給はり給ひけると、聞え侍りし物を、長暦元年神無月の廿三日、關白殿の馬場院に、上東門院わたらせ給ひて、行幸有りて、君たち院司など、加階どもも給ひき。かくて年も明けぬれば、又正月二日、上東門院に朝覲の行幸有りて、いづくと申しながら、猶此の院のけしき有様、山の嵐萬代よはぶ聲を傳へ、池の水も千年の影をすまして、待ちとり奉り給ひき。先帝隠れさせ給へれども、かく打ちつゞきておはします、二代の國母と申すもやんごとなく、又三日は、東宮朝覲の行啓とて、内に参らせ給ふ。帝の行幸よりも、ことしけからぬ物からはなやかに珍し。ゆけいのすけ、一員など、引きつぐろひたるけしき、心ことな

るべし。すべらぎの御よそひ、みこの宮の御ぞの色かはりて、珍しく、御拜の有様など、袖ふり給ふ立居の御よそひ、うつくしうて、よろこびの泪もおさへがたくなん有りける。つらなれる紫の袖も、ことばまたがへるあけもみどりも、花やかなる御垣の内の、春なかりけりとなん聞え侍りし。

同紀のうちほしあひ

中宮皇子いつしか、去年よりたゞならずならせ給ひて、霜月の十三日に左のおとゞのたかくら殿に、出でさせ給へりしが、次の年四月朔日、女御子うみ奉らせ給ひて、又打ちつゞきて、又の年も同じやうにまかり出でさせ給ひて、丹波守ゆきたけのぬしの家にて、長暦三年八月十九日に、猶女宮うみ奉り給ひて、同じ廿八日に、うせ給ひにき。御年廿四、淺ましく哀なる事限りなし。いとゞ秋の哀そ

ひて、有明の月も、心をいたましむる色、夕の露のまけきも、涙を催すつまなるべし。かくて九月九日、内より故中宮の御爲に、七寺に御ずきやうせさせ給ふ。帝御後朱雀よく奉りて、廢朝とて、清涼殿のみすおろしこめられ、日のおもの参るも、聲たてし奏しなどする事もせず。よろづまめりたるまゝに、夕の螢をも哀と詠めさせ給ひ、秋の燈挑けつくさせ給ひつゝぞ、心くるしき折ふし也けるに、二十日ぞ解陣とか云ひて、萬よろれいさまにて、御殿のみすなとも巻きあけられ、少しはるゝけしき也けれど、猶御氣色は盡きせずぞ見えさせ給ひける。神無月も過ぎぬれば、御忌するに成りて、彼の失せ給ひにし宮にて、佛事あり。梢の色も、風のけしきも、思ひ知りがほなるさま也。くれなるはらはぬ昔の跡も、法の場とて、ことに清めらるゝに付きて、折にふれて哀盡きせざりけり。霜月の七日ぞ、

内には始めて政せさせ給ふ。南殿に出で居させ給ひて、官奏など有るべし。後一條院、中宮威子に侍りける出雲の御と云ふが、此の宮に侍りし伊賀少將がもとに、

いかばかり君歎くらん。數ならぬ、
身だにまぐれし秋の哀を、

とよめりけり。秋の宮打ちつゝき、秋失せさせ給へるに、いとらう有りて、思ひよられけるも、哀にこそ聞え侍りしか。又の年の七月七日、關白殿に、内より御せうそく有りて、

去年の秋、わかれし星も逢ひぬめり。
などたふひなき、我が身なるらむ。

とよませ給ひて侍りけんこそ、いとかたじけなく、情おほくおはしましける御事かなと、承りしか。楊貴妃の契も、思ひ出でられて、

星合の空、いかに詠め明かさせ給ひけん、いと哀に尋ね行くまほろしもがなとや思召しけん、おしはかられてこそ傳へ聞き侍りしか。詩などをかしく作らせ給ひけるとこそ聞き侍りしか。秋のかげいづちかかへらんとする。と云ふことを、

路非山水誰堪趁、跡任乾坤豈得尋、

など作らせ給ひけるとこそ承りしか。乾坤と云ふは、あめつちと云ふことにて侍る。長久二年三月四日、花宴させ給ひて、歌の舌は驚に志かず。と云ふ題を賜ひて、桂を折る試みありと、聞え侍りき。次の年のやよひの頃堀川右大臣頼宗、その時春宮大夫と申しよに、女御奉り給ひき。帥の内のおとゞの、むすめの御はら也。大臣たちにもおとり給はず、いとめでたく侍りき。神無月の頃、大二條殿内大臣と聞え給ひし、二の君内侍督に成りて参り玉ひて、かた

花やかにかおはじき。十一月には、二尊仁の宮御文はじめとて、式部大輔たかちかど聞えし博士御註孝經と云ふ文、教へ奉りて、藏人さねまさ、尙復とて、それも御師なるべし。同じ四年の三月にも、佐國孝言時綱國綱など云ふ者ども、試みせさせ給ひき。弓場殿にてぞ、作りて奉り給ひける。もと桂を折りたるは、博士を望み、まだ折らぬものは、ともし火の望みなん有りける。句毎に、もろこしの博士の名など置きければ、作りかなふる人、かたくなん有りける。寛徳元年八月に、大隅守長國、但馬のすけに成り、民部丞生行、同國のぞうになし給ひて、こまうどの、彼の國につきたるとおらはせ給ひき。御なやみとて、明る年正月十六日に、位させ給ひ、御くじおろさせ給ふ。御年卅七になんおはしまし。世をたもたせ給ふ事、九年なりき。まだ若くおはしますさまを、惜み奉らずと云ふ人はなし。

先帝廿九にておはしましき。是ればされど、みそち餘りの春秋過ぎさせ給へり。母後の餘りながくおはしますに、かくのみおはしませは、御さいはひの中にも、御歎き絶えざるべし。猶御孫の一のみ後冷泉は帝、二のみ後三條は東宮におはしませは、いとやんどとなき御有様なるべし。

(四)今昔物語

この物語の作者は、後冷泉天皇の比の人なる、宇治大納言隆國なりと云傳ふ。此の書の記事は、歴史を補ふこと少からず。又文辭に、一種の趣味ありて、おもしき詞つかひなども交れど、舊本はいとむづかしき漢字をさまざまに用ひたり。こゝには、後世假名まじりに書下したる書に據りて抄録せり。宇治拾遺物語といふも、これと類以の書にて、まかも同文をさへ載せられたれど、彼れは全く鎌倉時代になりし書なれば、次編に譲る。

大織冠鎌足大臣始めて藤原の姓を賜はる事

今は昔、皇極天皇と申しける女帝の御代に一人の大臣あり。蘇我の蝦夷といふ馬子の大臣の子なり。蝦夷とし、むろ公に仕へまつりて老にのぞみければ、我が身は、老い耄けて、殊に内に參る事なし。されは子の入鹿をもて代りとして、常に參らせつゝ公事は申し行ひける。これによりて入鹿世をほし、いまよにして、天下を心に任せふるまひける間、天智天皇は皇子にておはしましけるに、鞠蹴させたまひける處に、入鹿もまゐりて蹴けり。又その時に大織冠のいまだ公卿などにも至りたまはざりけるほどに、大臣の鎌足とておはしける、參りてともに蹴たまひけるに、皇子のまりけ給ひける御沓の御足にはなれてあがりけるを、入鹿ほこりたる心にて、皇子の御事を何ともおもはずして、あざけりて、その御くつを外さまに蹴やりてけり。皇子この事をきはめてはし

たなしとおぼしめしければ、顔を赤めて立たせたまへるを、入鹿
 なほ、事ともおもはざる氣色にて立てりければ、大織冠その御沓
 をまどひとりて奉りけるに、入鹿われあしき事をふるまひつと
 もおもはざりけり。皇子は入鹿がかくはしたなくしつるに、鎌足
 くつを急ぎとりてはかせ奉るを、ありがたくうれしき志なり。こ
 の人は我れに心よせありて、思ふなりけりと心得させ給ひ、その
 後は事にふれて、むつまじき者におぼしめしたりける。大織冠も、
 見給ふやうやありけん。とりわけごとくに、皇子に仕へまつり給ひ
 けり。入鹿はほこりの餘りに、後々には天皇の仰せ給ふ事をも、や
 ゝもすれば、うけひかず。又仰もなき事をも、行ひなどしければ、皇
 子いよく心のうちに、びんなしとおぼしてけり。まかる間、皇子
 人なき所に、ひそかに大織冠をまねぎとり給ひて、仰せ給はく。入

鹿常に、我が爲に、無禮を致す。あやしと思ふ程に、天皇の御ため
 にも、動もすれば違勅す。されはつひに、此の入鹿世に有りたらば、吉事
 あらじ。此れを殺さむと思ふと、大織冠が心にも、常にびんなき事
 なりと思ひ給ひけるほどに、御子のかく仰せ給へば、おのが心
 にも、然思ひ給ふる事なり。御定有らば、相構ふべしと申給ひければ、
 皇子よろこびて、其の由を議し固め給ひつ。其の後大極殿にして、
 節會行はれける日、皇子大織冠にのたまはく。入鹿をは、今日うつ
 べきなり。大織冠その由をうけたまはり給ひて、謀を成して、入鹿
 が穿たる太刀をとかせつれば、入鹿おまへにてねり立つる程に、
 臣ありて表を讀む。此の表を讀む臣、今日かゝる大事有るべしや
 と知りたりけむ。臆したる氣色にて、ふるひければ、入鹿は此の事
 を心得ずして、いかにかくは、ふるひ給ふぞと問ひければ、表讀む

臣、天皇の御前に出でたれば、おくしてふるはるゝなり。とぞ答へける。まかる間、大織冠みづから太刀を抜きて走りよりて、入鹿か肩を打ち給ひつるに、入鹿走りゆるるを、皇子太刀を以て、其の首うち給ふ時、入鹿高御座のもとに倒れて申さく。我れ罪なし。何事に依りて殺さるゝぞと、天皇此の事を、かねて知ろしめさぬにあはせて、女帝にましましければ、おちさせ給ひて、高御座の帳を、おちさせ給ひつれば、入鹿の首、其の帳にぞ當りて落ちにける。其の時に入鹿が従者、家に走り行き、父の大臣に、此の事を告ぐ。大臣これを聞きて、おどろき泣き悲しびて、今は世にありとも、何にかせんといひて、みづから家に火をさして、家と共に焼け死にき。多くの寶ども、心に任せて取り置きたりけるも、焼け失せぬ。神の御代より傳はりし寶どもは、其の時に、皆焼け失せたるなり。其の後

天皇、程なく失せさせ給ひぬれば、皇子位に即かせ給ひぬ。天智天皇と申すこれなり。大織冠を以て、即、内大臣になされぬ。大中臣の姓を改めて、藤原とす。此の朝の内大臣、こゝに始る。然る間、天皇ひとへに、此の内大臣を寵愛して、國の政を任せ給ひ、后をゆづり給ふ。其の後、もとより懷妊して、大臣の家にして生めるは、謂はゆる多武峯の、定惠和尚と申すこれなり。其の後、又、大臣の御子をうめり。謂はゆる淡海公これなり。かくて内大臣も、身をすてゝ公に仕へまつり給ふ事かぎりなし。まかる間、大臣身に病を受け給へれば、天皇大臣の家に行幸して、病を訪らはせ給へり。大臣遂に失せ給へれば、其の葬送の夜、天皇行幸して、山おくりせむと有りければ、時の大臣公卿ありて、天皇の御身に、大臣の葬送の山送り、例なき事なりと、度々奏しければ、なくく還らせ給ひぬ。此の大織

冠實の御名をば、鎌足と申す。其の御子孫繁昌して、藤原氏此の朝に満ち弘びて、ひまなしとなむ。語り傳へたると也。

源頼光の郎等たち紫野にて物見る事

今はむかし、攝津の守源の頼光の朝臣の郎等にて有りける。平の貞道、平の季武、坂田の公時と云ふ三人のつばものありけり。皆みるゆもきらしく、手きと魂ふとく、思量ありて、おろかなる事なかりけり。されは東にても、度々よき事どもして、人におそれられたる、つばものどもなりければ、攝津の守も、是れらをやむ事なき者にして、うしろまへに立てよどつかひける。志かるあひだ、賀茂の祭のかへさの日、此の三人の兵いひ合せて、いかでか今日物を見るべきとはかりけるに、馬に乗りつゞきて、紫野へゆかむに、いみじく見ゆるしかるべし。歩より顔をふたぎて行くべきには

あらず。物はきはめて見まほし。いかゞすべきと歎きけるに、一人がいはく。いざ某大徳が車を借りて、それののりて見むと、また一人がいはく。乗り知らぬ車ののりて、殿原にあひ奉りて、引きおとされて、蹴られなんや。よしなき死にをやせむずらむと、今一人がいはく。下簾をたれて、女車の様にて見えんはいかにと、今二人の者、この義よかりなむといひて、かくいふ大徳の車、すでに借りもてきぬ。下簾をたれて、この三人のつばもの、志づの紺の水干、袴などを着ながら乗りて、履物どもは皆車に取り入れて、三人袖もいださずして乗りぬれば、心にくき女車に成りぬ。さて紫野の方へやらせて行くほどに、三人ながら、いまだ車にも乗らざりける者どもにて、物のふたに、物を入れて振らむ様に、三人ふりあはされて、或は立板に額をうち、あるはかのれどち頭を打合せて、のけざ

まに倒れ、うつふし様にふし、くるめきてゆくに、すべて堪ふべきにあらず。かくして行くほどに、三人ながら酔ひぬれば、ふみ板にもの吐きちらして、烏帽子をもおとしてけり。牛の逸物にて、ぱやく引きつゝ行けば、横なまりたることをどもにて、いたくなはやめそ。はやめそ。といひ行けば、同じくやりつゞけてゆく車ども、うしろなるかち雑色ども、これを聞きてあやしびて、この女房車は、いかなる人の乗りたるにかあらむ。東鳥の鳴きあひたる様にて、舌だみたるは、心もえぬ事かな。東人の娘どもの物見るにやあらむと思へども、こゑけはひ大きにて、男ごゑなり。すべて心得ず、覺えけり。かくて既に紫野に行きつきて、車かきおろして立てば、あまり疾く行きて立てつれば、事なるを待つほどに、この者ども、車に酔ひたる心ちどもなれば、きはめて心ちあしくなりて、目く

るめきて、萬の物さかさまに見ゆ。いたく酔ひにければ、三人ながら、尻をさかさまにて寐入りにけり。然る間に、事なりて物どもわたるを、死にたるやうに、寐入りたる者どもなれば、つゆ知らで止みぬ。事はてゝ、車どもかけさわぐ時になむ、目さめて、驚きたりける。心ちはあし。寐入りて物は見ず成りぬれば、腹だゝしくねたく、思ふ事限りなきに、またかへさの車、飛はしとよめむに、我らの生きてはありなむや。千人の軍の中に、馬をばしらせて入らむ事は、常に習ひたる事なればおそれず。只貧窮氣なる、牛飼わらはの奴ひとり身をまかせて、かくなやまされては、何の益の有るべきぞ。この車にてまた歸らば、我れらが命はありなむや。されは只まはしかくてあらむ。扱大路をすまして、歩より行くべきなりと定めて、人すみて後、三人ながら車よりおりぬれば、車はかへしやり

つ。その後みな沓をはきて、烏帽子を鼻のもとまで引き入れて、扇をもて顔をふたぎてぞ、攝津の守の、一條の家にはかへりたりける。季武が後にかたりしなり。猛きつはものと申せども、車の戦は不用にさぶらふなり。其れよりのち、懲るともこりて、車のあたりにはまかりよらずと、されは心たけく、思量かしとき者どもなれども、いまだ車に一度も、乗らざりける者どもにて、かく悲しう酔死たりける、をこの事なりとなむ、語り傳へたるとや。

◎消息文

消息文とは、女子の書牘文をいふ。上古以來、男子の書牘は、皆漢文體を用ふるを例とせしかど、女子は大かた、假名を以て平常の言語を寫し、彼れ是れ贈答たりしなり。されば初めは、唯直情を述ぶるに止まりしが、後には閑麗婉曲ならむをつとめて、遂に自然と、書式やうのことも定りぬ。かくて此の文體は、言事を記

すに便にして、通用志易ければ、次第に男子の間にも、行はるゝ事とぞなりけらし。但しこゝなるは、多く物語中に出てたる文にて、その作者らが、書中の人物の意をもて、かきたるものなり。

右大臣阿部のみうしより、唐の王慶が許に、火鼠の裘買ひて
おこせと、誂へやりし返事、

火鼠の裘、我が國になきものなり。昔には聞けども、いまだ見ぬものなり。世にある物ならば、此の國にも持てまうで來なまし。いと
かたきあきなひなり。されども、もし天然にたまさかにもて渡り
なほ、もし長者のあたりに訪らひ求めんに、なきものならば、使に
そへて、こかねをは返し奉らむ。

王慶より、火鼠の裘に添へて、右大臣に奉れる文、

火鼠の裘、辛うして人を出して索め奉る、今の世にも、昔の世にも、この皮はたばやすくなき物なりけり。むかしかしとき、天竺のひじり、此の國にもて渡りて侍りける、西の山寺にありと聞き及びて、おほやけに申して、辛うして買取りて奉る。あたひの金すくなしと、國司使に申しよかは、王慶が物加へて買ひたり。今こがね五十兩賜はるべし。船のかへらむにつけて、たび送れ。もしこがね賜はらぬ物ならば、裘のしちかへしたべ。

(竹取物語)

友の他國にあるにおくる

あさましうえたいめせで、月日のへぬる事、忘れやまたまひけむと、いたくおもひわびつゝ侍り。世の中の人の心は、めかるれば、忘れぬべきものにてこそありけれ。

(伊勢物語)

紫の上より須磨のやどりに

あさましく、をやみなき頃のけしきに、空さへどづることちして、ながめやるかたなくなん。

浦風やいかにふくらん。おもひやる、

そでうちぬらしなみまなきころ、

源氏の君かへりこと

かへすゝ、いみじきめのかぎりを見つくしはてつる有りさまなれば、いまほど、世を思ひはなるゝ心のみ、まさり侍れど、かゞみを見ても、どのたまひし面影の、はなるゝよなきを、かくおぼつかなく、がらやと、こゝらかなしき、さまゝのうれはしさは、さしおかれて、

はるかにも思ひやるかな。志らざりし、

浦よりをちにうらづたひして、

夢のうちなることちのみして、さめはてぬほど、いかにひがこと
おほからん。

(源氏物語)

明石の入道より明石の上に
この年ごろは、同じ世の中のうち、めづらひ侍りつれども、何か
は、かくながら、身をかへたるやうに、思ひたまへなむと、させる
となきかぎり、は、きこえうけ給はず。かなふみ見給ふるは、め
いとまはりて、念佛も懈怠するやうに、やくなうてなん。御せうそ
こも奉らぬを、つてにうけたまはれば、若君は春宮にまゐり給ひ
て、まこと宮生まれ給へる由をなん。ふかくよろこび申侍る。其の
ゆるは、みづからかくつたなき、山おじの身に、いまさら、この世
のさかえをおもふにも侍らず。過ぎにし方のごころ、心きたな
く、六時のつとめにも、たゞ御事をこころに掛けて、蓮のうへの露

の願ひをば、さし置きてなん、ねんじ奉りし。吾がおもと生れ給は
んとせし、その年の二月の其の夜の夢にみしやう、みづから須彌
の山を右の手にさしけたり。山の左右より月日の光り、さやかに
さしいで、世をてらす。みづからは、山のしものかけに、かくれて、
そのひかりにあたらず。山をばひろき海にうかべおきて、小さき
舟にのりて、西の方をさして、こぎ行くとなむ見侍りし。夢さめて
あしたより、かずならぬ身に、たのむところ、出来ながら、何ごどに
つけてか、さるいかりしきとをばまぢいでむと、心のうちにおも
ひ侍りしを、その比よりはらまれ給ひしことな、俗の方のふみ
を見侍りしにも、また内教のごころを尋ぬる中にも、夢を信ずべ
きと多く侍りしかは、いやまきふところのうちにも、かたじけな
く、思ひいたづき奉りしかど、ちからおよばぬ身に、おもひ給へか

ねてなん、かゝる道におもふき侍りにし。又この國のとにしづみ侍りて、老の波、さらに立ちかへらじと思ひとちめて、此の浦に年ごろ侍りしほども、わが君をたのむにおもひ聞え侍りしかはなん、心ひとつに、多くの願をたて侍りし。其のかへりまうし、平らかに、思ひのごと、時にあひ給ふ若きみ、國のはよとなり給ひて、願ひみちたまはんよに、すみよしの御社を始め、はたし申し給へ。さらに何事をか疑ひ侍らむ。是れひとつのおもひ近き世にかなひ侍りぬれば、はるかに、西のかた、十萬億の國へだてたる、九品のうへの望み、うたがひなく成り侍りぬれば、今はたゞむかふるはちすを、まちはべる程、そのゆふべまで、水草清き山の末にて、つとめ侍らんとてなむ、まかりいりぬる。

ひかりいでん曉ちかく成にけり。

今ぞみしよの夢がたりする、

(源氏物語)

山の阿闍梨より宇治の姫君に

年あらたまりて、何事かおはしますらむ。御いのりはたゆみなく、つかうまつり侍り。今は一所の御事をなん、やすからずねんじ聞えさす。これはわらはべの、くやうして侍るはつ穂なり。

君にとて、あまたの春をつみしかは、

つねをわすれぬはつわらびなり。

おまへに、よみ申さしめたまへ。

(源氏物語)

左衛門尉則光より清少納言のもとに

あす御讀經のけちらわんにて、宰相中將の御物忌にこもり給へるに、いもうどのあり所申せとせめらるゝにすぢなし。さらに、えかくし申すまじき。そことや聞かせ奉るべき。いかに、仰せにまた

がはむ。

(枕草子)

大貳有國より伊周公のもとに

思ひかけぬかたにおはしましたるに、京のともおぼつかなく驚
きながら、まゐり候ふべきに、九國のかみにてさぶらふ身なれば、
さすがに思ひのまゝに、えまかりありかぬになむ、いまよで聞え
ぬ。何事も、たゞ仰せごとになん従ひつかふまつるべき。世の中
いのち長くさぶらひけるは、わが殿の御するに、つかうまつるべ
きとなむ、おもひたまふる。

(榮花物語)

中古の歌

當時代の初期には、漢學流行の餘り、詩を賦する事、盛りになりけるが、殊更嵯峨
天皇以來は、大學なる、紀傳道の學生等が科試にも、詩賦を以て、及第仕官せしめ
られしからに、彼の萬葉集の如きは、遂に高閣に束ねられて、此の書のある事も
忘れにけり。されば清和天皇は、萬葉集はいつばかり作れるぞと、文屋在季に
問はせらるゝに至りたり。後に村上天皇は、萬葉集の歌の、やう／＼人に忘れ
て、誰れも知るものなきに至らんを憂ひ給ひて、源順、大中臣能宣、清原元輔等に
仰せて、訓點撰ばせ給へりき。

かゝる勢なりしかば、奈良時代の、さしむ、花やかなりし長歌は、いたく廢れて、誰
れその姿を、まねび詠ずる人とても、あらざりき。然るに續日本後紀、仁明天皇の
嘉祥二年三月の條に、興福寺の法師等、天皇の寶算四十に満たせ給へるを賀し
奉りて、佛像四十軀を造り、これに長歌を副へて、奉獻すとして、長歌一篇を載せ、其
の次に記して云はく、夫倭歌之體、比興爲先、感動人情、最在茲矣。季世陵遲、斯道已
墜、今至僧中、頗存古韻、所謂禮失則求之於野、故採而載之、と云へり。此の歌餘りに

長ければ引き難けれど是れすら萬葉集のに比べては、姿體いたく劣り、句調甚拙し。それより後さまになりては、編句の法いよ／＼亂れて、唯詞をならべ、句を續けたる迄なり、殊に五音七音と續け、ん古來の句調は、いつしか革りて、七五の運びとなり、昔の雅藻やうやくにして失せにけり。其の徴は、左に抄する古今集の長歌を見ても知るべし。

(一)ふる歌奉りし時の目錄の其の長歌

貫之

ちはやふる	かみの御代より	くれたけの	よ／＼にも絶 ^{たま} ず
あまびこの	おとほのやまの	はるがすみ	おもひ亂れて
さみだれの	うらもどゞろに	さ夜ふけて	山ほとゝぎす
なくごどに	たれもねざめて	からにしき	たつたの山の
もみぢ葉を	見 ^み てのみ志のお	かみなづき	しられ／＼て
ふゆの夜の	にはもはだれに	ふるゆきの	猶消えかへり
としごどに	ときにつけつゝ	あはれてふ	とをいひつゝ

きみぎのみ	千代にといはふ	世のひとの	思ひするがの
富士の根の	もゆるおもひも	あかずして	別るゝなみだ
ふちごろも	おれるこゝろも	やちくさの	言の葉ごどに
すべらぎの	おほせかしこみ	まき／＼の	中につくすと
伊勢の海の	うらの志ほがひ	拾ひあつめ	取りとすれど
たまの緒の	みじかきこゝろ	思ひあへず	猶あらたまの
としをへて	おほみやにのみ	ひさかたの	晝よるわかず
つかふとて	かへりみもせぬ	わがやどの	忍草おふる
板まあらみ	ふるはるさめの	もりやしぬらむ	

(二)ふる歌に加へて奉れる長歌

くれたけの	よ／＼のふること	なかりせば	伊香保の沼の
いかにして	おもふこゝろを	のはへまし	あはれ昔べ

壬生忠岑

ありきてふ	ひとまるこそは	うれしけれ	身は下ながら
ことの葉を	あまつそらまで	きこえあけ	末の世までの
あとしなし	いまもおほせの	くだれるは	塵にわけとや
ちりの身に	つもれることを	とほるらむ	これを思へば
いにしへも	くすりけがせる	けだものゝ	雲にほえけむ
こゝちして	ちゞのなさけも	おもほえず	一つこゝろぞ
ほこらしき	かくはあれども	てるひかり	近きまもりの
身なりしき	たれかはあきの	くるかたに	あさむき出て
みかきより	どのへもる身の	みかきもり	をさく敷も
おもほえず	こゝのかさねの	うちにては	あらしの風も
きかざりき	いまは野やまし	ちかければ	春はかすみに
たなびかれ	なつはうづせみ	なきくらし	秋は志ふれに

そでをかし	ふゆは志もにぞ	せめらるゝ	かゝる侘しき
身ながらに	つもれるとしを	志るせれば	いつゝの六に
なりけり	これにそはれる	わたくしの	老のかずさへ
やよければ	身はいやくて	としたかき	ことの苦しさ
かくしつゝ	ながらのはしの	ながらへて	なにはの浦に
たつなみの	なみのしわにや	おほよれむ	さすかに命
をしければ	こしのくになる	志らやまの	かしらは白く
なりぬとも	おとほのたきの	おとにきく	おいず死すの
くすりもが	きみが八千代を	わかえつゝ見む	

君が世に逢坂山のいは志みづ、
 こがくれたりと、おもひけるかな。

三冬の長歌

凡何内躬恒

ちはやぶる かみなづきとや けさよりは 曇りもあへず
 うちまふれ もみちとよに ふるさとの よし野の山の
 山あらしも さむく日ごとに なりゆけは 玉の緒とけて
 こきちらし あられみだれて 志もこほり 彌かたまれる
 庭のおもに むらく見ゆる ふゆくさの うへに降しく
 志らゆきの つもりつもりて あらたまの 年のあまたも
 すらしつるかな

左に抄するは前の歌ともよりは凡五十年餘りの後村上天皇の朝の人達が作
 にして拾遺集に載せられたり。

(四)身のまづみぬる事をなげきて勘解由判官にて

源 順

あらたまの としのはたちら たらざりし ときはの山の
 やまさむみ かぜもさはらぬ ふちごろも 二たびたちし

あさぎりに こゝろもそらに まどひそめ みなしで草に
 なりしより ものおもふ言の 葉をまけみ けぬべき露の
 夜は置きて なつはみぎはに もえわたる ほたるを袖に
 ひろひつゝ ふゆははなかと 見えまがひ 此もかのもに
 ふりつゝもる ゆきをたもとに あつめつゝ ふみ見て出し
 みちはなほ 身のうきにのみ ありけれは ことも彼處も
 あしねはふ 志たにのみこそ 志づみけれ 誰こゝのつ
 さはみづに なくたづのねを ひさかたの 雲のうへまで
 かくれなみ たかくきこゆる かひありて いひ流しけん
 ひとはなほ かひもなきさに みつしほの 世には辛くて
 すみの江の まつはいたづら かいぬれど 緑のところも
 ぬぎすてん はるはいつとも 志らなみの 波路にいたく

ゆきかよひ　ゆきどりあへず　なりにつける　舟のわれをし
きみまらば　あはれいまだに　まづめじと　あまのつり綱
うちばへて　ひくとしきかは　ものはおもはじ

(五)かへし

大中臣能宣

世のなかを　おもへはくるし　わするれば　えも忘れず
たれもみな　おなじみやまの　まづが枝と　枯ることなく
すべらぎの　ちよもやちよも　つかへんと　たかき頼みを
かくれぬの　またよりねさす　あやめらさ　あやなき身にも
ひとなみに　かゝることろを　おもひつゝ　よにふる雪を
きみはしも　ふゆはどりつみ　なつはまた　草のほたるを
あつめつゝ　ひかりさやけき　ひさかたの　月のかつらを
さるまで　しづれにそぼち　つゆにぬれ　へにけん袖の

ふかみどり　いろあせがたに　いまはなり　かつ下葉より
くれなるに　うつろひはてん　秋にあはゞ　まづ開けなん
はなよりも　こだかきかげと　あふがれん　物どこそ見し
まほがまの　うらさびしけに　なぞもかく　世をしも思ひ
なすのゆの　たぎるゆゑをも　かまへつゝ　わが身を人の
身になして　おもひくらべよ　もゝまきに　あかし暮して
とこなつの　くもるはるけき　みなひとに　おくれて歎く
我もあるらし

左に載するも、右の長歌よりは、又五十年餘りの後、一條天皇の御世の末に、詠ま
れしものにて、前の貫之朝臣の歌より、凡百年ばかり後となる。

(六)弘徽殿女御の御許に参らする歌

宇治中將の室

かずならぬ　道まほどのみ　なげきつゝ　はかなく露の

おきふしに	明けくれたけの	おひゆかん	この世の末に
なりてだに	うれしきふしや	みゆかどて	いつしかどこそ
まつやまの	たかき梢に	すごもれる	まだこつたはぬ
うらひすを	梅の匂ひに	さそはせて	こち風はやく
吹きぬれば	谷のこほりも	うちとけて	霞のころも
たちあつゝ	まづえ迄にも	うちなびき	岸の藤なみ
淺からぬ	匂ひに通ふ	むらさきの	雲のたなびく
あさゆふに	今もみどりの	まつにのみ	心をかけて
すゝすまに	夏きぬべしと	きこゆなり	やまほとゝぎす
さ夜ふかく	かたらひ渡る	こゑきけは	何のこゝろを
思ふとも	いひやいぬまの	あやめふさ	長きためしに
ひきなして	やつまにかゝる	ものとのみ	よもぎの宿を

うちばらひ	玉のうてなと	おもひつゝ	空蟬の世の
はかなさも	忘れはてゝは	ちとせへん	君がみそぎを
いのりてぞ	かきながしやる	かはせにも	かたへすゞしき
風の音に	驚かれても	いろくの	花のたもとの
ゆかしさを	秋ふかくのみ	頼まれて	もみぢの錦
きりたえず	よを長月と	いひおける	久しきことを
きくの花	匂ひを染る	まふれにも	雨の志たふる
かひや有ると	はかなくすゝす	月日に	心もとなく
思ふまに	かしらの霜の	おけるをも	打ち拂ひつゝ
ありへんと	思ひむなしく	なさじとぞ	衣のすそに
はらゝみて	ちりもすゑじと	みがきつる	玉のひかりの
おもはずに	消えにしよりは	かきくらす	心のやみに

まどはれて	あるべきかたも	なみだのみ	つきせぬものと
ながれつゝ	戀しきかけも	とゞまらず	袖の志がらみ
せきかねて	たきのことるだに	をしまれず	まどひいりては
たづぬれど	志での山なる	わかれぢは	いきて見るべき
かたもなし	あはれ忘れぬ	ながらにば	日數はかりを
かぞふとて	鳴き渡るめる	よふことり	ほのかにきみが
こゑばかり	こゑばかりにて	やましろの	とはにいはせの
もりすぎて	わればかりのみ	すみの江の	まつゆきかたも
波かくる	岸のまに	わすれ草	おひや茂らんと
思ふにも	のきにかゝれる	さゝがれの	みながらたえぬ
たよりだに	むすはざりけん	いとよわみ	心ぼそさぞ
つきもせぬ	むなしき空を	おもひわび	雁のむれるし

あと見れば	ひとり常世に	おきふしも	まくらの下に
いけらじと	うきみを歎く	をじどりの	つがひはなれて
よもすがら	うはけの霜を	はらひわび	こほるつらゝに
とぢられて	きし方知らず	なくこゑは	夢かとのみぞ
おどろきて	消え歸りぬる	たましひは	ゆくへも知らず
こがれつゝ	つりに年ふる	あまびとも	ふねながしたる
とし月も	かひなきかたは	まさるとも	かるもかきやり
もどむとも	みるめなきさに	うつなみの	あとだに見えず
消なんとは	おもひの外に	つのくれの	志ばし計りも
ながらへは	なにはのことも	いまはたゞ	あまたかきつむ
もしほらさ	志ほのたれをか	たのむべき	けふり絶えせぬ
たきものゝ	このかたみなる	思ひあらは	獨のことさず

打ちばふき 衣のすそに はらゝめど 身の程知らず
たのむめるかな

みづふきに思ふこゝろをなほごとも

えもかきあへぬなみたなりけり。

(七)同御かへし

弘徽殿女御

いにしへを 思ひ出づれば 雪きえぬ かきねの草は
ふたはにて おひ出でん事ぞ かなかりし つのらむあしの
はかなくて かれ渡りたる 水きはに つがはぬをしは
さびしくて ふたりのはねの 下にたに せはくつごひし
どりのこの くもの中にぞ たゞよひし ひるはおのく
飛びわかれ よるはふるすに 歸りつゝ つはさを戀ひて
なきわびし あまたの聲と きくばかり かなしきことは

廣澤の いけるかひなき 身なれども 波のたちるに
つけつゝも かなみにこそは たのみしか 誰れもわか世の
わかければ 行末とほき こまつはら こ高くならん
枝もあらは 其の影にこそ かくれめど 思ふこゝろは
ふかみどり いくしほとだに おもほえず 思ひそめてし
ころもでの 色もかはらで としふれは おひ出る竹の
おのが世に うれしきふしを みるごどに いかなる世にか
かれけんと 思ひけるこそ はかなけれ あしたの露を
玉と見て みがきし程に 消えにけり 夕のまつ の
風の音に かなしきことを 志らべつゝ ねをのみぞ鳴く
むらどりの むれたる中に 只ひとり いかなるかたに
とびゆきて 知る人もなく まどふらん とまるたらひは

おほくして 戀しかなしと おもへども 今はむなしき
 おほぞらの くも計りをぞ かたみには 明暮に見る
 月かけの この下やみに まどふめる なけきの杜の
 志けさをぞ はらはん方も おもほえぬ みる人ごとの
 ことわりの 涙の かはき ながすかな ましてやそこの
 わたりには いかばかりかは たふらん ふちをも知らず
 なけくなる こゝろの程を 思ひやる 人のうへさへ
 なけかるゝかな

君もさはむかしの人とおもはなん。

われもかたみにたのむべきかな。

右の歌は、榮花物語石蔭の巻に出でたるを抄録せし也。世の下れると共に、長歌の老らべもいたく下りて、對句疊句の法も見えず。韻脚のひゞきも聞えず。唯う

るさきまで、詞の云ひかけ多かるは、後世の謠ひものゝ姿に似たり。

長歌は、かく衰へにたれど、短歌は、質を去りて、華に移りたる趣きありて、一種の風姿をぞ備へける。今此の由来を略述せん。當代代の初期、和歌は漢詩に壓倒せられしと、前に云へる如くなりしが、歌よむわざは、さすがに我が國風なれば、全く廢れはてしに非ず。彼の古今集序に擧げられたる、六人の歌仙らは、和歌復興までの間を、維き持ちたる人々なりき。かくて、幾年波の立ちかへる時運到りて、宇多天皇の頃には、宮中または公卿の第において、歌合の會を催す事行はれぬ。是れ當時、朝にも野にも、詩を嗜む者相會して探韻し、絶句を賦して興を遣りし、時流に倣ひたるものにて、和歌にも題を設け、思を搦へて詠み出づる事となりしは、此の頃よりぞ始りけむ。萬葉集に何に寄すといふ歌あるは、感まづ興りてそれを事にも物にも寄せたるにて、此の時のとは異なり。又長歌の替れて、短歌のみ行はれしも、即坐に題を出して、詠ずる慣ひとなれ。ばならん。

古今集序に見るもの聞くものに付けて、よみ出せる也といひし歌は、昔の事に於て、當時よりは、やうく心に巧みて、作るもの多くして、一種の藝術となりけん

とは折句、物名、香冠などいふ技に巧を競ひたるにても知るべし。されば古代の如く、平常の口語が、やがて歌の詞となるは稀にして、雅なるを索め、優なるを撰ぶやうにもなりにけり。彼れ是れに因りて、奈良時代の歌の氣概ありて、雄渾なる句調は弛みためれど、又おのづから質を去りて華となり、樸を棄て、雅に移りたる所は見ゆるなり。そは古今集以下の書にある、歌こそ證なれ。
長歌短歌につぎて、旋頭歌も、古今集以下の書に、いさゝかは載せられたれど、當時これも、長歌の如く、多くは行はれざりけん。殊に長歌よりは、尙詠み出づる人、稀なりけむとおぼし。

此の外、後一條天皇の長徳中(九百餘年前)の撰なる拾遺集には、始めて連歌を載せられたり。そも、連歌は、二人相唱和して、一首の短歌をなすものにて、古事記に、日本武尊、甲斐の酒折宮にて、火焚ひこの老人と、唱和し給ひしに始まり、歌集に見えたるは、萬葉集第八に、

佐保川の水をせき上げ殖えし田を

茹早飯はひとりなるべし

尼作

家持續

とある、一首を載せたり。又伊勢物語、枕草子の類にも、其の世の人々の、連歌したる事ども多かるが、遂にはこれを、勅撰の集中にも、採り入るゝに至りたり。連歌は多く、坐興の頓作になるものにて、頗る滑稽を盡し、秀句に云ふを旨とするに似たり。されば字音の語をも、俗言をも、憚らず用ひ來たれり。始めは、これに、法式とてもなかりしが、足利時代に至りて、新式を定められ、その季世には、一轉して、俳諧の發句といふもの始りぬ。精しくは後に云ふべし。

以上長短歌、旋頭歌、連歌の外に、亦今様といふものも、此の時代より折々見ゆ。今様とは、當世風の歌といふ意にて、詞も姿も、元より古代の歌とは同じからざるを云へるなり。されば、是れはた漢語をも、佛語をも多くまじへつ。其の躰を示さんため、末にいさゝか附録し置くべし。

(一)古今和歌集

古今集は、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之を首め、友則、躬恒、忠岑等が、勅を承りて撰ぜし所にして、四季、賀、離別、羈旅、物名、戀、雜、哀傷等、二十卷に分かれたれ。短歌長歌

旋頭歌等千餘首載せられたり其の序は、紀氏の書かれたる上に掲げつ。本集は、實に勅撰歌集の始にして、此の後世々の勅撰も、皆此の例を追はれ、体裁も部立も、大かた本書に倣はれぬ。嗚呼さしも漢風の流行せし、時代にありて漢文漢詩の外に、國文國歌のある事を、世に知らしめし、紀氏の如きは、國文學上、偉功を奏せし人と云ふべし。

本集に載せられし歌どもは、四人の歌仙一致して、意詞共に優れたるを採られたれば、打見るには、事もなく覺ゆるものから、能く吟じ味ふに、詞のうるはしく、趣向の面白き、風姿の清麗優閑なる、殆前後に、其の比を見ずとの評もあり。且讀人知らずとある歌の中には、奈良のてぶりの、うつろひ來しも少からねば、此の集こそ、花實二つながら備はりたれ。とさへぞ云ふめる。左に抄する歌どもは、悉此の評の證ともならじなれど、大かたの風調を知らせんとして、

春立ちける日よめる

紀 貫之

袖ひちて、結びし水のこほれるを、春立つけふの、風やどくらむ。

題まらず

讀人まらず

みやまには、松の雪だに消えなくに、都は野への若菜つみけり。

歌奉れと仰せられし時

貫 之

春日野の、若菜つみにと、白たへの袖ふりはへて、人の行くらむ。

寛平の御時后の宮の歌合に

源 宗于

ときはなる松のみどりも、春くれは、今一しほの、色さまりけり。

西大寺の邊の柳を

僧 正 遍 昭

浅みどり、いとよりかけて、まら露を、たまにもぬける、春の柳か。

水のほとりに梅花の咲きけるを

伊 勢

春ごとに、流るゝ川を花と見て、折られぬみづに、袖ぞぬれなん。
年をへて、花の鏡となる水は、ちりかゝるを、や曇るといふらむ。

寛平の御時后の宮の歌合に

素 性 法 師

ちると見て、あるべきものを、梅の花、うたて匂ひの、袖に止れる、
渚の院にて櫻を見て

在 原 業 平

世の中に、たえて櫻のなかりせば、春の心は、のどけからまし。

櫻の盛りに久しく問はざりける人の來たりける時に 讀人志らず

あだなりと、名にこそたてれ。櫻花、年にまれなる、人もまちけり。

返し 業平

けふ來ずば、あすは雪とぞ降^ふなまし。消^きずは有^あとも、花と見ましや。

櫻の花のちるを 紀友則

ひさかたの、光のどけき春の日に、まづ心なく、花のちるらむ。

題しらす 大伴黒主

春雨の、ふるは涙か。さくら花、ちるを惜しまぬ、人しなければ、

春のどく過ぐるを 大河内躬恒

梓弓、はる立ちしより、年月の、いるが如くも、おもほゆるかな。

彌生のつどもりがたに、山を越えけるに、山川より花の流れけるを、

清原深養父

花ちれる、水のまにくとめくれば、山にも春は、なくなりけり。

音羽山を越えける時に郭公のなくをきいて 友則

音羽山、けさ越えくれは、ほとよぎす、こずる遙に、今ぞなくなる。

寛平御時后の宮の歌合に 貫之

夏の夜の、ふすかどすれば郭公、なくひと聲に、あくるしのよめ、

雷の壺に人々集りて秋の夜をしむ歌よみけるついでに

躬恒

かく斗り、をしと思ふ夜をいたづらに、寝て明すらん、人さへぞうき。

是貞のみこの家の歌合に 大江千里

月見れば、ちゞに物こそ悲しけれ。わが身一つの、秋にはあらねど、

初雁を 在原元方

待つ人に、あらぬものから初雁の、けさ鳴く聲の、珍らしきかな。

是貞のみこの家の歌合に 文屋康秀

草も木も、色かはれどもわたつ海の、浪の中にぞ、秋なかりける。

壬生忠岑

秋の夜の、露をばつゆとおきながら、雁の涙や、のべを染むらむ。
かみなびの、御室の山を秋ゆけは、錦たちきる、こゝちこそすれ。

梅の花に雪のふれるを

小野 篁

花の色は、雪にまじりて見えずとも、香をたに匂へ。人の知るべく、

大和國にまかれりける時に雪のふりけるを見て

坂上是則

朝ぼらけ、有明の月と見るまで、吉野の里に、ふれる志らゆき、

年のはてに

春道列樹

きのふといひ、今日と暮してあすか川、流れて早き、月日也けり。

かにはさくら

貫 之

かつげとも、波のなかに、は、さくらられて、風吹くごとくに、浮き沈む玉、

たちはな

小野 志げかげ

足引の、山たち、はなれ、行く雲の、やどり定めぬ、世にこそありけれ。

さうび

貫 之

我はけさ、うひにぞ見つる。花の色を、仇なる物と、云ふべかりけり。

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふ五文字を

句のかしらにあきて

貫 之

をぐら山、みねたちならし、なく鹿の、へにけむ秋を、去る人ぞなき。

きちかう

友 則

あきちかう、野はなりにけり。白露の、おける草葉も、色かはりゆく。

さゝまつ びは ばせをば

紀のめのと

いさゝめに、時まつ間に、そ、ひはへぬる、心はせをば、人に見えつゝ。

なし なつめ くるみ

兵 衛

あぢきなし、歎きなつめそ、憂きとに、あびくるみをも、捨ぬ物から、

紀友則かみまつりにける時

貫 之

あすまらぬ我身と思へど暮ぬ間のけふは人こそ悲しかりけれ。

忠 岑

時しもあれ。秋やは人の別るべき。あるを見るだに戀しきものを、

深草の帝の御時藏人頭にて夜ひる仕う奉りけるを諒問になりければ更に世にも交らずして比叡の山に登りてかしらあるしてけり其の又の年管人御ぶく脱ぎてあるはかうぶり賜はりなど喜びけるを聞きて

遍 昭

みな人は花のところもに、なりぬなり。苔の袂よ。かわきだにせよ。

病にわづらひ侍りける秋こゝちのたのもしげなくおぼえければよみ人のもとにつかはしける

干 里

もみち葉を、風にまかせて、見るよりも、はかなきものは、命也けり。

病して弱くなりける時

業 平

遂に行く、道とは豫て聞きしかど、きのふけふとは、思はざりけり。

題志らず

業 平

大方は、月をもめでじ。是れぞ此の、積れば人の、老となるもの、

文屋康秀が三河のぞうに成りし縣見にはえ出でたゝじやと云はれける返事に

小野 小町

わびぬれば、身をうき草の、根を絶て、誘ふ水あらは、往んぞ思ふ。

額志らず

惟喬 親王

白雲の、たえずた靡く、峯にだに、住めは住ぬる、世にこそありけれ。

田村の御時事にあたりて津の國すまといふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣しける

在原 行平

わくらばは、問ふ人あらは、須磨の浦に、藻鹽垂つゝ、わぶと答へよ。

つかさとりて侍りける時

平 貞文

浮世には、門させりとも、見えなくに、なごか我身の、出がてにす。

○旋頭歌

まらざ

讀人まらざ

うちわたす をちかた人に もの申すわれ
そのそこに 白くさけるは なにのはなぞも

返し

同

はるされは 野へに花さく 見れどあかぬ花
まひなしに 唯なのるべき 花の名なれや

題まらす

同

はつ瀬がは ふる川のべに ふたもとある杉
としを経て 又もあひ見む ふたもとある杉

貫

之

きみがさす みかさの山の もみち葉のいろ
かみなづき しづれの雨の そむるなりけり

(二)後撰和歌集

後撰集は村上天皇の天曆五年に源順大中臣能宣坂上望城紀時文清原元輔ら五人を梨壺に召して萬葉集に訓點せしめ給ひしついでに撰ばしめ給ひし書なり。これは古今集に入らぬ歌を昔の今ものも後に撰ずとてかく名づけたり。然れども古今に比べていたく劣れりとは世の定論なり。無名抄に云はく。後撰にはよろしき歌古今にとり盡されて後幾程も經ざりければ歌得がたくして姿をばえらばず心を先とせりと夜の鶴に又云はく。後撰にはやさしき歌多く又みだりがはしき歌も多くまじりたり。梨壺の五人心々やかはりけん。と本集のみだりがはしきは唯撰擇の上のみならず詞書の足らずして心得がたき或は讀人をとりたがへたる又戀雜などの歌と見ゆるが四季の中に入りたるもあり。是等は後世傳寫の誤にもあんか總じて當時の歌の趣きは大かた其の折その事にふれて心に思へる筋を偽り飾るとなく又婉曲に云ひなす事もなく在りのまゝに打出でたる體とおぼし。さればふと見れば淺はかなるものから人情の誠は多く現はれたり。雜の歌などにはさすがによろしきも多く見ゆとす。

春たつ日よめる

兼盛王

今日よりは萩のやけ原かきわけて若菜つみにと誰れを誘はむ。

月の面白かりける夜花を見て

源 信明

あたら夜の月と花とを同じくば、こゝろ志れらん人に見せはや。

顯老らす

在原元方

いそのかみ、ふる野の草も秋はなほ、色とにこそあらたまりけれ。

全

讀人志らす

うちつけに、物ぞ悲しき。木の葉ちる、秋の始をけふぞと思へば、

左大臣の家にてかれこれ題をさぐりて歌よみけるに

露といふ文字を得侍りて

藤原忠國

われならぬ、草葉も物はおもひけり。袖より外における志ら露、

題老らす

讀み人も

散ると見て、袖にうくれどたまらぬは、荒たる波の花にぞ有ける。

遠くまかりける人に餞し侍りける時

橘 直幹

おもひやる、心ばかりば、さばらじを、なに隔つらん。峯の志ら雲、

先坊うひ給ひての秋

玄上朝臣、女

もろ共に、おきるし秋の露ばかり、かゝらむものと思ひかけきや。

(三)拾遺和歌集

拾遺和歌集は、一條天皇の長徳年中、大納言藤原公任卿の撰ずる所なり。古くより、花山院の御撰にやといふ説もあれど、加茂真淵翁は非なりとして、尙、公任卿の撰といふ方に従はれたり。本集所載の歌の評は、無名抄に「拾遺の頃より、其の躰ことの外ちかくなりて、ことわり隈なくあらはれ、姿すなほなるをよとしす。」と云はれたり。ことわり隈なく現はれとは、餘韻の乏しきをいふか。そは既に、後撰の時より然り。されども、本集にのする歌は、後撰のよりは優なるが、多げに見ゆ。

本書の撰者公任卿は、當代に聞えたる文學者にて、八雲御抄にも、公任卿寛和の頃より、天下無双の名人とて、既に二百餘歳を経たり。在世の時は云ふに及ばず、經信卿俊賴以下、近く俊成存生までは、空の日月の如く仰ぐ。とまであれば、その

閑歴を聊附記せん。公任卿は四條大納言と申して、三條太政大臣頼忠公の長子にて、一條、三條、後一條の三御世を歴たる人なり。和漢の學に通じ、能書の聞え高く、殊に和歌にすぐれ、管絃などの諸藝にまで、いたり深かりき。一とせ御堂關白道長公、大井川の逍遙を催されし時、詩歌管絃の船を分ち設けて、おのゝく堪能の人をのせられたりしに、公任卿は、何の船にかのらるべきと、道長關白に尋ねられ、和歌の船に乗るべしとて、さて後に、

あさまだき 小倉山あらしの風山イのさむければ、紅葉の錦きぬ人そなき。

と詠じたり。事はて、後、人に誦られけるは、いづれの船にか乗るべきと、問はれたるこそ、我が身ながら、心おごりせられしか。然はあれど、詩の船に乗りて、是れほどの詩作りたらんには、名を揚げてんにと云はれし由、大鏡、古今著聞集などにも見えたり。

かゝれば、上の御寵もめでたく、世人の崇敬も厚くして、歌よむ人などは、卿が賞美の詞を得ては、生涯の榮とせし由も、諸書に散見せり。卿の著書にて、北山抄和漢朗詠集などは、殊に世の重寶たり。卿は後一條天皇の萬壽二年、最愛のむすめ

におくれ悲歎のあまり、遂に致仕して、初瀬の別荘にこもり、僧となりて、ひたすら閑寂を樂しみ、長久二年、よはひ七十六歳にて身まかりき。其れらの様は、榮花物語にいとあはれにかゝれたり。

冷泉院御屏風の繪に梅の花ある家にまらうど
來たるどころ

平 兼盛

わが宿の梅の立ちえや見えつらむ。思ひの外に、君がきませる、

屏風に

大中臣能宣

近くてぞ色もまされる。青柳の糸はよりてぞ、見るべかりける。

題まらざ

清原元輔

問ふ人も、あらじと思ひし山里の花のたよりに人め見るかな。

天曆御時歌合に

壬生忠見

さよふけて、ねさめさりせば、郭公、人づてにこそ、聞くべかりけれ。

少將に侍りける時駒迎にまかりて

大貳高遠

あふ坂の、關の岩かどふみならし、山たち出づる、きり原のこま、

屏風に八月十五夜池ある家に入遊びまたる所 源 順

水の面に、てる月なみをかぞふれば、こよひぞ秋の、最中なりける。

藤原爲頼

おぼつかないづこなるらむ。虫の音を、尋ねは草の、露や亂れん。

大中臣能宣

紅葉せぬ、ときはの山は吹く風の、音にや秋を、きゝわたるらむ。

北白河の山莊に花のおもしろく咲きたりけるを

見に入々來たりければ

右衛門督公任

春來てぞ、人もとひける。山里は、花こそ宿の、あるじなりけれ。

延喜の御時南殿に散りつみたりける花を見て 源 公忠

どのもりの、伴のみやつこ心して、此の春ばかり、朝ぎよめすな。

むすめにおくれて

中 務

忘れられて、まはしまどろむ程もがな。いつかは君を、夢ならで見ん。

(四)後拾遺和歌集

此の集は、白河天皇の應徳三年、中納言通俊卿の撰進せられし所なり。序文も、同じ卿のかゝれたる、上に掲げたり。此の序にも、歌の撰みざまにも、當時非難ありし由なるが、其の頃經信卿とて、名人の聞えありしをおきて、此の卿の撰ばれたるが第一に、世人のうけひかさりし所なり。本集に撰び載せられたる、歌のすがたは、前の集よりは、いよゝ古調を離れて、今めかしく、天然に遠くなりて、人功につきたる所あり。されば當時の人も、之を後拾遺體と名つけて、嫌へりと云ふ。

正月二日逢坂關にて鶯の聲を聞きて 源 兼澄

故郷へ、行く人あらはことづてん。けふ鶯のはつ音きゝつと、

正月ばかりに津の國に侍りける頃人のもとに云ひ

つあはしける 能因法師

心あらむ人に見せはや。津の國の、難波わたりの、春のけしきを、

春の夜のやみはあやなしといふことを

前大納言公任

春の夜のやみにしなれば、匂ひくる、梅より外の、花なかりけり。

題志らす

和泉式部

我が宿の櫻はかひもなかりけり。あるじがらこそ、人も見にくれ。

中納言定頼

年をへて、花に心をくだくかな。をしむにどまる、春はなけれど、

螢を

源重之

音もせで、おもひにもゆる螢こそ、鳴く虫よりも、あはれ也けれ。

後一條院生れさせ給ひて七夜に人々参りあひて

女房盃いだせと侍りければ

紫式部

珍らしき、光さしそふさかつきは、もちながらこそ、千代も廻らぬ。

一條院うせ給ひて後撫子の花の侍りけるを後一條院幼く

おはしまして何心も知らでとらせ給ひければおぼし出づ

る事やありけん

上東門院

見るまゝに、露ぞこぼるゝ。おくれにし、心もまらぬ、なでしこの花、

王昭君をよめる

赤染衛門

なけきこし、道の露にもまさりけり。なれにし里を、こふる涙は、

延久五年三月住吉に詣で、かへさに

民部卿經信

おきつ風、吹きにけらしな。住吉の、松のまづえを、あらふしら波、

(五)金葉和歌集

此の集は、崇徳院の天治元年、白河院の院宣を以て、前木工頭源俊頼三度まで撰みかへられしものなり。されば歌どものゆでたきは、云ふも更に、一くだりの端詞に至るまで、能くとのへるは、古今集にも次ぐべしとの評もあり。然はあれど、無名抄には「金葉集は、又わざとをかしからむとして、軽々なる歌多し」と云へり。げにも當時のすがたは、求めて面白からむとして、詞の云ひかけを好み、聊、狂歌めきたるもなきにあらざ。但し勅撰の集などは、さすがに優なるを撰び

集めたれば、異様なるも少かるべけれど、さらぬは、一意新奇を競ひて、方言俗語をも交へ、心に思ひよれる儘を、憚らず云ひつゝけたり。是れ當時の名人たち、やうやく古今以來の古風に飽きて、新に珍らしく詠み出でんと、勉めしに因るならむ。

實行卿の家の歌合に霞の心を

藤原顯輔

年毎に、かはらぬものは、春霞たつたの山の、けしきなりけり。

池邊柳を

源 雅兼

風ふけは、波のあやおる、池水に、糸ひきそふる、岸のあをやぎ、

夜思落花といへることを

隆源法師

衣手に、ひるはちりつむさくら花、よるは心に、かゝるなりけり。

新院の御方にて殘花風に薫はしといへることを

中納言雅定

散りばてぬ、花のありかを知らずれば、厭ひし風ぞ、けふは嬉しき。

鳥羽殿の歌合に郭公を

修理大夫顯季

みやま出で、まだ里なれぬ郭公、うはの空なる音をや鳴くらん。

水風暮涼といへることを

源 俊賴

風吹けば、蓮のうき葉に玉こえて、涼しくなりぬ。ひぐらしの聲、

宇治前太政大臣家の歌合に月を

一宮紀伊

山のはに、雲のころもを、ぬぎ捨て、ひとりも月の、立ち登る哉。

鏡山、みねより出づる月なれば、曇る夜もなき、かけをこそ見れ。

秋月如畫といふことを

藤原隆經

草の上の、露なかりせはいかにして、今宵の月を、夜と知らまし。

水上の月を

藤原光實

月影の、さすにまかせて行く舟は、明石の浦や、とまりなるらん。

月のあかゝりける頃、明石にまかりて月を見てのぼりたりけるに

都の人々月はいかにと尋ねければ

平 忠盛

有明の、月もあかしの浦風に、波はかりこそ、よると見えしか。

野花帯露といふとを

肥 後

白露と人はいへども野べ見れば、おく花ごどに、色ぞかばれる。

宇治前太政大臣大井河にまかりたりけるともにまかりて

水邊紅葉といへるを

大納言經信

大井川いは波たかし。筏士よ、きしの紅葉に、あからめなせそ。

○連歌

居たりける所の北の方に聲なまりたる人の物云ひけるを

聞きて

永成法師

あづま人の、こゑこそ北にきこゆなれ。

律師慶範

陸奥の國より、こしにやあるらむ。

田中に馬のたてるを見て

永源法師

田にはむ駒は、くろにぞありける。

永成法師

苗代の、水にはかけと見えけれど、

宇治へまかりける道にて日頃雨のふりければ水の出で、

加茂川を男の袴をぬぎて手にさしげてわたるを見て

頼綱

かも川を、つるはぎにても、渡るかな。

信綱

かり袴をは、をしと思ひて、

(六)詞花和歌集

此の集は、近衛天皇の天養元年、崇徳上皇の教旨によりて、左京大夫藤原顯輔の、撰ぜし所なり。歌の躰は、金葉と大やうかはらず、阿佛尼の夜の鶴にも、金葉詞花などは、歌の姿かはりて、一ふしをかしき所ある歌、多く侍り。今めきたることに、ち候ふやらん」と云へり。

題まらず

源 頼政

みやま木に、その梢とも見えざりし、櫻は花に、あらはれにけり。

贈左大臣の家に歌合志侍りけるに

顯季

種まきし、わが撫子の花さかり、いくあさ露の、おきて見つらむ。

水邊納涼といへることを

藤原家經

風吹けば、川べ涼しくよる波の、たちかへるべき、心ちこそせね。

題志らず

永源法師

八重葎、まけれる宿は、よもすがら、虫の音きくぞ、とりどころなる。

寛治元年太皇太后宮の歌合に

大江匡房

夕されは、何かいそがん。もみぢ葉の、下てる山は、夜もこえなん。

正月一日子うみたる人にむつき遣はすとて

伊勢大輔

珍らしく、けふ立ち初むる鶴の子は、千代のむつきを、重ぬべき哉。

長恨歌の心を

源道濟

思ひかね、別れて野べを來て見れば、淺ぢが原に秋風ぞ吹く。

(七)千載和歌集

此の集は、後鳥羽天皇の文治四年、後白河院の院宣によりて、藤原俊成卿、これを撰びぬ。卿は金葉詞花などの歌躰を、よろしからず思ひけん。殊にやさしくうるはしきを採られたり。されは本集の歌躰は、古今集の歌の、細くなれる姿して、而も後拾遺風よりは、少し實めきたるものなりとぞ。

本集の撰者俊成卿は、和歌に於きて、一代の名匠と聞え、その世は論なし。後の世まで、斯の道の人の、仰ぐ所なれば、其の略傳を述べんに、卿は御堂關白道長公四代の後にして、始め六條顯輔卿、詞花集の撰者の養子となりて、顯廣と名のりしが、六條家の歌風を見かぎりて、更に基俊朝臣の弟子となれり。當時基俊、俊頼とて、兩人世に聞えたる歌人と仰がれしが、其の中らひ宜しからずして、雙方自然流義を立て、其の門生たち、互に誹りあひたるを、俊成は基俊の弟子なりながら、あながちに師の歌のみは譽められず。俊頼の歌の風姿、優なる事を感じ、基俊の學力長じたるをば稱へられき。或人卿に對ひて、師の基俊が悪まるゝ、俊頼の歌を好まるゝは、いかにと問ひければ、答へて、我れは唯歌の姿を見て慕ふなり。

人がらにはよらず。と云はれければ、世の人、卿の心の偏頗なく、道の爲に公平なる執心をぞ貴びける。卿は又歌よまるゝ時、常に淨衣を着して正しく坐し、桐火桶をいだきながら、心をこらして、聊もくつろぎたる容姿なかりきといふ。されば詠める歌の姿も、ちのづから心正しう、詞もやさしく整ひければ、世人これを、桐火桶の躰と云へり。とぞ、高倉天皇の安元二年、六十二歳の時入道して、法名釋阿と號せり。本集を撰ばれしは、此の後の事なり。さて土御門天皇の元久元年、十一月晦日、九十一歳にて薨せられしなりけり。

堀河院の御時百首歌奉りける時春雨の心を

大江匡房

よも山に、木の芽春雨降りぬれば、かそいろはとや、花のたのまん。

同じ御時早蕨を

藤原基俊

みやま木の、かげのゝ下の、下蕨もえ出づれども、知る人もなし。

歸雁の心を

左近中將良經

ながむれば、霞める空の浮雲と、ひとつになりぬ。かへるかりがね。

加茂社の歌合に花の歌とて

藤原公衡

花ざかり、四方の山べに、あくがれて、春は心の、身にそはぬかな。

春日社の歌合に

顯昭法師

吉野川、みかさばさしも、まさらじを、青根をこすや。花の白波、

三月つごもり

式子内親王

ながむれば、思ひやるべき、方ぞなき。春の限りの、夕ぐれのをら、

行路三月盡といへる心を

琳賢法師

もろとも、同じ都はいでしかど、遂にも春に、わかれぬるかな。

題志らす

法印慈圓

山かけや、岩もる清水、音さえて、夏の外なる、ひららしのこゑ、

顯昭法師

さらぬだに、光すゞしき夏の夜の、月を清水に、やどしつるかな。

藤原伊家

秋山のふもとをこむるうす霧は裾野の萩のまがきなりけり。

百首の歌奉りける時秋の歌とて

俊成

夕されば野べの秋風身に志みて、うづらなくなり。深草の里、

百首の歌の中に月の歌とて

俊成

いはゞしる、水の白玉かず見えて、清たき川に、すめる月かな。

藤原清輔

志ほがまの、浦ふく風に霧はれて、八十嶋かけて、すめる月かけ。

題志らず

大貳三位

遙なる、もろこしまでも行くものは、秋の寐覺の、こゝろ也けり。

心の外なる事ありて、まらぬ國にありける時

平康頼

かくはかり、憂き身のほども忘られて、猶戀しきは、都なりけり。

さつまがた、沖の小島にわれはありと、親には、告げよ。八重の汐風。

以上の勅撰の集どもを品評せし書は、古來少からぬと近き世に故柳原吉野氏の文藝類纂、小中村博士の歌道沿革志など、簡單にして盡せれば、余はそれらを基とし、聊管見をもまじへて述べしなり。

○今様

若菜

菅公

そのふの梅の　おひ風に　我が住む山も　春めきぬ

かど田の雪も　むら消えて　若菜つむべく　野はなりぬ

手枕

侍従行成

君があひこし　手枕の　絶えて久しく　成りにけり

何しにひまなく　むつれけむ　ながらへもせぬ　ものゆゑに

松のこかけ

松の木陰に　立ちよれば　千歳のみどりぞ　身にはしむ

梅か枝かさしに　さしつれば　春の雪こそ　ふりかゝれ

齋都の月

後徳大寺實定

古き都に 来て見れば 浅芽が原とぞ 荒れにける
月の光は くまなくて 秋風のぞみ 身にはしむ

蓬萊山

祇王

蓬萊山には 千とせふる 萬歳千秋 かさなれり
松の枝には 鶴すくひ 巖の上には 龜あそぶ

初見參

ほとけ

君を初めて 見る時は 千世もへぬべし 姫小まつ
御前の池なる 龜をかか 鶴こそ群れ居て 遊ぶなれ

熊野権現にたむけつる

平康頼

白露は月の 光りにて 王土うるほす 化あり
権現ふねに 棹さして 向ひの岸に よする波

又

さまも心も 變るかな 落つる涙は 瀧のみづ
妙法蓮華の 池となり 弘誓の舟に 棹さして
沈むわれらを 乗せたまへ

又

佛の方便 なりければ 神祇の威光 たのもしや
たふけば必 響きあり 仰けは定めて 花ぞ咲く

右に掲げし、今様の歌どもは、勅撰集には載せられず、諸書に散見するを採りたるなり。元來今様歌は管絃に合奏して、誦ひ上げたるもあり、又さらぬもあり、然れども形式は共に七五の調べを四句並ぶるものとす。稀には又五句になりたるも、又音の餘れるも、足らざるもあれど、強ちに之を制せず。よろづ古格の歌の式をちねばこそ、今様の名はあるならめ。

明治二十七年五月廿一日印刷
同 年同月廿四日發行

定價金五十錢



大賣捌所

著作者 關 根 正 直

東京市本郷區藤川町一番地

發行者 井 上 圓 成

本郷區本郷六丁目五番地

印刷者 根 岸 高 光

牛込區市ヶ谷加賀町二丁目廿一番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發行所 哲 學 書 院

本郷區本郷六丁目五番地

大坂 松村九兵衛

東京 小林新兵衛

大坂 梅原龜七

大坂 吉岡平助

名古屋 川瀬代助

長岡 上田屋治平

東京 東京堂

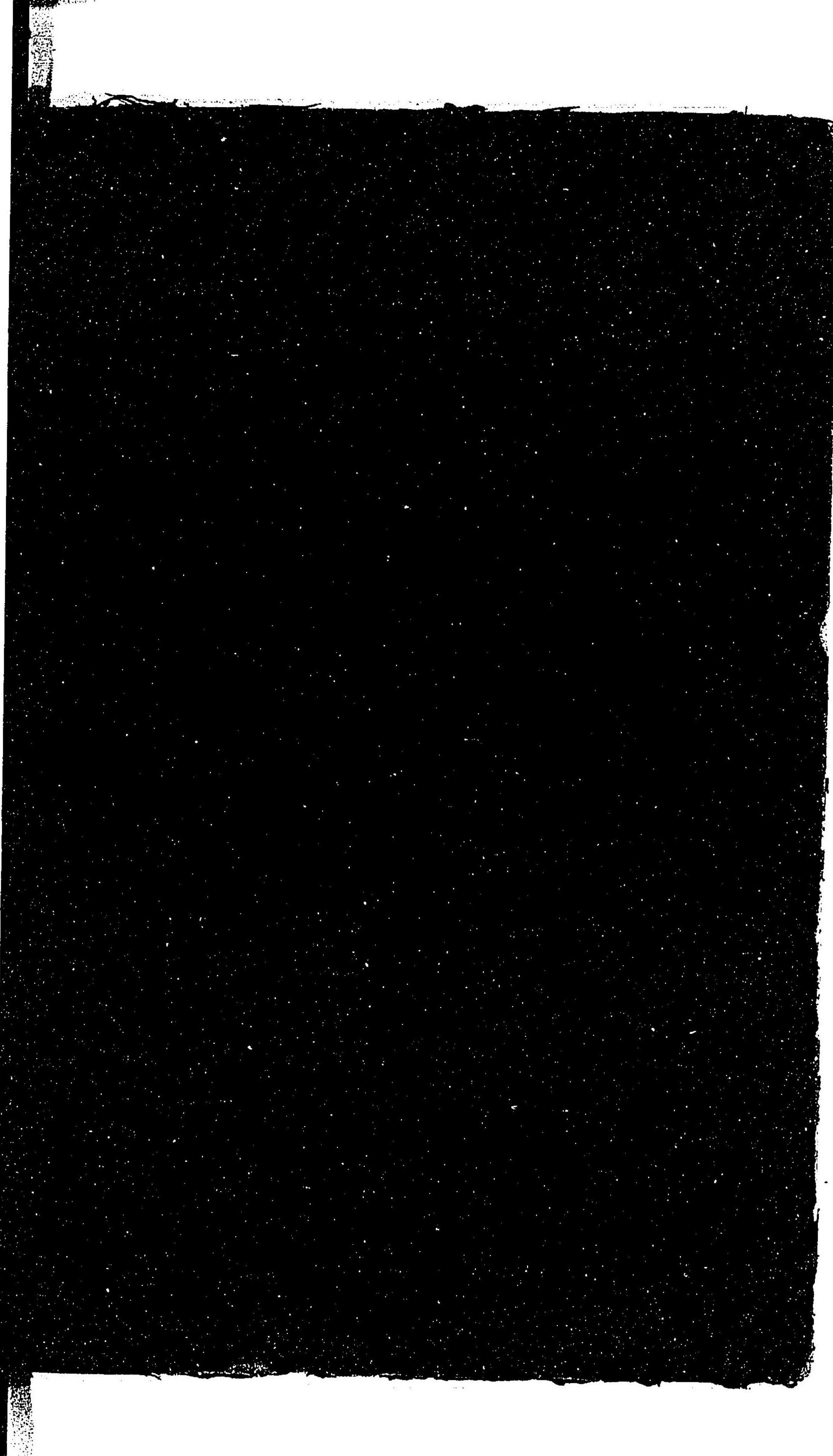
東京 群書城

東京 東海堂

佐賀 西村進化堂

新刊書名	著譯者	定價	郵稅
強者の權利の競争	加藤弘之	四十五錢	六錢
雜居尙早	同	十五錢	二錢
二百年後の吾人	同	十五錢	二錢
小學教育改良論	同	十錢	二錢
最新學派經濟學	山本榮三郎	四十五錢	六錢
記應術講義	井上圓了	十二錢	不
勅語と佛教	太田教尊	四十五錢	六錢
阿彌陀佛總論草案	齋藤唯信	三十五錢	六錢
豐臣氏法度考	三宅長策	十五錢	二錢
井上博士と基督教徒	關卓作	二十八錢	不
同續編	同	二十八錢	同
同收結編	同	三十五錢	同
忠孝活論	井上圓了	十五錢	二錢
禪宗哲學序論	同	三十錢	四錢
耶蘇教末路	藤島了稔	二十錢	四錢
佛教忠孝編	村上專精	三十五錢	六錢
破邪叢書	神崎一作	三十九錢	十二錢
善惡標準	寺田福壽	十五錢	二錢
政教時論	磯部武者五郎	十錢	二錢
耶蘇新論	岡本監輔	十錢	二錢
世界に於ける佛教徒	能海寬	十五錢	二錢
破邪論集	内藤耻叟	二十八錢	不
法話說教集	教導會	十八錢	四錢

44
244



44
244

085002-001-7

44-244

歴代文学

関根 正直/編

M27

DBB-0432



